

令和４年７月８日（金）

１５：００～１６：３０

４Ｆ視聴覚室

１ 開会

２ 所長あいさつ

- ・ 当センターは、本県の生涯学習推進の中心施設として持続可能な地域づくりの実現を目指し、職員一丸となって様々な学びと活動の橋渡しに取り組み、生涯学習支援の充実に努めている。
- ・ 職員にはウェルビーイングになるように工夫してほしいと伝えている。ウェルビーイングとは、WHO憲章の前文にあり、精神的・肉体的・社会的に満たされた状態のことをいう。職員一人一人がウェルビーイングで、丁寧に業務に取り組むことで学びと活動の橋渡し、人と人とのつながりづくりを支援しやすくなるのではと考えている。そして、持続可能な地域づくりとは、満たされた状態の人々が集まってできるものだと考えている。
- ・ 本県の生涯学習の中核施設としての役割を一層果たしていく意味でも、生涯学習や社会教育を推進する事業に資するような調査研究や、生涯学習、社会教育関係者や指導者養成の各種研修事業の拡充に力を入れていきたい。
- ・ 秋田に誇りや自信をもつなど、県民の意識に働き掛け、地域で持続可能な地域づくりに視点を置いた事業や研修・講座を推進していきたい。

３ 出席者紹介及び資料確認

４ 委員長・副委員長あいさつ

委員長

１９９５年に秋田に来て、２７年になる。これまで前任者の先生が社会教育を担当していた。秋田に来て５年くらいは、生涯学習センターの生涯大学システムに関する調査研究報告書などに、協力させていただいた。

副委員長

センター主催の「イウベ・キクベ」に参加した。これからもそういった場にできるだけ参加し、皆さんの声を受け止められるように努めたい。

５ 案件

（１）前年度の事業報告と今年度の主な事業計画について

①副主幹（兼）学習事業班長

- ・ 生涯学習センターの目的は、持続可能な地域づくりの実現が、最終的なゴール。そのために、シンクタンク機能、研修人材育成、情報発信に取り組んでいる。広い範囲の生涯学習の中で、特に障害者の生涯学習、防災、持続可能な地域づくりに重点を置き

ている。持続可能な地域づくりに関しては、コミュニティ・スクール、学校を核とした地域づくりの取組を行っている。

- ・調査研究、研修、講座の3機能を、相互に関係性を持たせながらやっていく。

<調査研究について>

- ・障害者の生涯学習に取り組んでいる。県内の特別支援学校に協力いただき、調査報告書をまとめ、昨年度はリーフレットという形で簡単に情報に触れられるものを作成した。当事者の声を聞くということで、オンラインによる熟議と、車椅子ユーザーの方を中心にした対面の熟議を実施した。
- ・令和4年度は、障害者の生涯学習の推進とつながりづくりということで市町村や企業等との協働によるモデルとなる仕組みの考案に力を入れる。リーフレットの活用状況調査の実施は、情報をどう届けるのか、センターをどう活用していくのかに重点を置く。
- ・市町村ではなかなか障害者の生涯学習の学習プログラムが実施できていないという現状がある。企画・周知・実施・振り返り全てを市町村等が行うのは負担が大きい。企画と実施に関しては、当センターの知見を生かし、協力したいと考えている。
- ・先日行われた熟議「みんなの思い イウベ・キクベ」では、36名の方が集まって話し合いをして、ニュースで紹介された。テレビ局の記者が、秋田県のこの取組を全国の皆さんに知ってほしい、と考えてくれた。参加した保護者、大学生からメールで感想が寄せられた。

<研修について>

- ・市町村の関係職員の研修、家庭教育の指導者の研修、市町村に出向いてのオーダーメイド型社会教育主事派遣などを行っている。そこでも障害者の生涯学習、防災、地域づくりの3つが大きいテーマになっている。
- ・コロナ禍でも、リアルタイムのアンケートや動画配信等、工夫し研修を行った。
- ・防災や、熟議のファシリテーター養成の研修もしている。参加者が少しでも前向きになるよう私たちも頑張っている。
- ・オーダーメイド型社会教育主事派遣は、市町村に出向いて、課題に関して一緒に話し合いながら解決していく姿勢で行っている。令和3年度は6つの市町村と県立学校で実施。具体的には地域学校協働活動、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）をスムーズに行うための熟議のファシリテートについて、家庭教育支援チームの作り方などとなっている。

<講座に関して>

- ・障害のある方のための防災講座では、障害があっても講座が十分成立する手応えを感じた。
- ・教養講座では、地域づくりなどで頑張っている人たちを取り上げて講座を組んでいる。

<その他>

- ・当センターでは、生涯学習団体への支援を行っている。昨年度は、センター発表交流を実施した。それぞれの団体を見合うことを通して、頑張っていることを共有する機会を作った。
- ・当センターの障害者の生涯学習の取組に賛同した企業が「あきたWith」という団体を作ってくれた。さらに、障害の有無に関わらず参加できるポッチャ交流会を企画し、企業の方からの物品の補助や、チームとしての参加など、目的を共有して一緒に頑張

った。

- ・ 障害者スポーツスペースは、学校のセカンドスクールの利用や、避難者交流センターのイベントなどの利用もある他に、市町村でのイベントでボッチャを体験する場としても利用されている。
- ・ 特別支援学校で、ポリ袋でご飯を炊く防災の授業も行った。
- ・ 今何をすべきかを考えながら取り組んでいく。

②各担当から

○障害者の生涯学習に関する調査研究（職員Ａ）

7月12日に調査研究委員会を予定している。秋田大学の教授を始め、6名の調査研究委員に入ってください。

○生涯学習・社会教育関係者研修（職員Ｂ）

生涯学習社会教育関係者研修は、生涯学習社会教育行政の充実を図るための研修である。新任職員研修はYouTube限定で公開し、閲覧は200以上となった。6月には地域学校協働活動推進員、地域担当連携教職員研修を兼ねた、熟議ファシリテーター研修も行われた。

○家庭教育支援指導者等研修（職員Ｃ）

各市町村で家庭教育支援を担う方や、これから携わろうとしている方々を対象に、支援の実際や仕組みづくり等に専門的知識を持って家庭教育支援を推進していくことを主眼としている研修である。年4回の計画で、現在は2回の研修を終えており、参加した方々のアンケートからは、大変参考になったという回答を多数いただいている。

○オーダーメイド型社会教育主事派遣（職員Ｂ）

今年度は3つの新規を含む7市町、学校に決まった。どのような方向性で進めるのか、その後の地域学校協働活動や学校運営のテーマ設定から始めている。複数年経過しているところは、熟議、ファシリテーターの役割ということで、個別具体的なところで役割を果たしている。

○団体支援（職委員Ｂ）

今年度は10の生涯学習団体を支援している。ボランティア支援は2団体の支援を行っている。若い団体であっても、2年以上が経過していて、ベテランの方々が増えている。自主的な学習、それから独立した団体の運営ができるようにということで、支援をしている。

○あきたスマートカレッジ（職員Ｄ）

センター開所以来、40年以上ご愛顧いただいている事業であり、センターの3機能の一つとして調査研究、研修といかに絡めていけるかというのを考えている。障害者の生涯学習や持続可能な地域づくりといったテーマを増やしていつている。感染症対策として急遽導入したりリモート講座だったが、今年度は正式に最初からリモート講座の利点を生かしたものを導入したり、あるいはインターネット上から電子申請ができるように、若者も気軽にスマホから申し込みできるようなシステムも導入したりして受講者の拡大を狙っている。

○展示スペース（職員Ｃ）

展示スペースは、エントランスホールを使って学びの成果を紹介したい団体や個人の方に展示する場所として利用してもらっている。今年度は2月まで。

○総務（総務班長）

利用人数統計は今年度、6月末で昨年の同時期と比較した場合、18.2%の増加。センター内の定員制限の緩和、消毒方法の見直しなどを進め、より安全で使いやすい環境を提供できるように努めている。それから昨年度、コロナの交付金を活用して、トイレの洋式化修繕を実施した。また、地下から1階地下3階の一部に関して洋式化した。その他に多目的トイレ補修を計画している。

（２）その他（意見、質問、感想等含む）

A 委員

「みんなの思い イウベ・キクベ」に関して、多様な人が参加する時にテーマ設定が難しいが、初めての人にしっかりとフォーカスしている安心感があった。センターの交流発表会について、団体同士意外と知らない人が多いなかで、どういう団体があるか同じ秋田の中でも全然分からない所がある。そのような時に「交流」という言葉が付いていたが、そうしたネーミングは大事だと思う。質問だが、いろいろな場づくりのモデルとなる仕組みづくりをするために、市町村や企業の方と協働し進める際に、広報、周知は市町村側に担当してもらうとのことだったが、周知の面で工夫があったら教えてほしい。

事業班長

地域にポイントを作っていく。例として、八郎潟町では幼稚園から高校まで貫くような会がある。情報の伝え方は地域によって多様で、良かれと思って提供しても響かない場合もある。私たちも一緒に周知方法を探りながら、そのプロセスを共有していく。市によっても地域ごとに差がある。

所長

今回の調査研究での市町村等との協働のように、失敗してもそれを共有し、繋がるということもある。「みんなの思い イウベ・キクベ」では36人の方がそれぞれの思いを持ち帰ってくれたところが感じられよかった。そのような機会を少しでも多く作れればと思う。

B 委員

「イウベ・キクベ」に参加する際、「どういう負荷がかかるんだろう」と思った。実際に参加したところ、終わった後の使命感みたいな負荷はかかっていなかった。人に伝えるのにも、そんなに重く感じて伝えなくてもいいという会だった。センターにはいつも敷居の低いセンターであってほしいと要望している。講座なども人数や形にとらわれることなく、今回のような普段着感覚で参加して、皆で積み上げていくような集まりがあっても良いと思う。様々な取り組みにも、できることから一歩と言わず、三分の一歩でも踏み出すような軽い気持ちで動き出せるような雰囲気作りも大事だと思う。参加してみるといろいろな人の声が聞こえてくる。その中で得た情報を周囲の人たちと共有しながら今後も頑張っていこうと思っている。質問だが、支援団体についての話があったが、団体の自主運営支援期間に3年、5年などの目安はあるのか。

職員D

現在2段階のプロセスで支援を考えている。初めて団体を設立したグループを支援する「立ち上げ支援」、それを終了した後、継続して安定するまでの支援を「活動支援」として2年というふうにしている。既に団体を設立しているが、なかなかうまくいか

ない団体には、活動支援からスタートで２年で支援期間を設定している。

委員長

経済的な支援はしているか。

職員Ｄ

直接的な経済的支援はしていない。活動場所の提供、自主企画の講座リアルタイムの広報のためのチラシの印刷など、経費節減のサポートをしている。

Ｃ委員

センターの立ち上げ支援、活動支援は充実している。市民おもしろ塾でもまなびサポート秋田で広報をお願いしているが、そうしたことも支援に入る。５０周年記念誌を見ると、センターが時代を捉え、講座や研修を開いている。今まさに障害者の生涯学習においては、企業とのコラボで目的を共有し、防災を取り上げている所が参考になった。市民おもしろ塾でも大学の先生と学ぶ機会を得た。生涯学習奨励員の研修会に参加したが、そうしたアウトリーチは継続してもらいたい。YouTubeでの配信の仕方の研修などもあればありがたい。

事業室班長

防災は大変有用なコンテンツだと思っている。地域づくりに関わるだけでなく、子ども、障害のある方、全てに関わる。災害は誰にとっても等しく起こる。そうした必要感が大切だと感じている。障害のある方対象に講座をすると、人を集めたとしても、なかなか障害のある方のために講座を開いたみたいになると、学ぶ意欲を喚起できない部分もあるかもしれない。どういう学びをしたいのか、必要感をちゃんと捉える必要があると感じる。YouTubeの配信については、市町村の職員専門研修が７月２０日にある。「障害者の生涯学習の実践方法と情報化支援について学ぼう」というテーマで市町村の方への研修を行う。情報発信については、当センターでもマニュアル化して頑張っているの、それを市町村の方々にも伝えたい。

Ｄ委員

毎年スピードを上げて新しい事業に着手し、その地域の方たちのことを思って取り組まれているのが素晴らしい。「イウベ・キクベ」についても、実際に開催することによって、それぞれの地域で実質化していくことにつながると思う。まずはやってみて伝えながら各地でも開催できるようにしていく工夫が素晴らしいと思った。私もサービス業で、たくさんのお客様に支えられている会社だが、自分たちの思いもあるが、実際サービスを使われる方たちが何を求めているのかを知ることが大事なことだと思う。そういった意味でもこういった活動は共通してる部分もあり、いい取り組みだと思う。あきたスマートカレッジの講師の中には、今の秋田を引っ張っていってくれているような方たちもたくさんいらっしゃる。講座ということを考えると、今は時間に縛られなくても情報収集できる時代になった。いつでも、どこでも、ということが、若者になればなるほど、そういう時代になってきているのでサブスクでの提供なども検討したらいいと思う。

Ｅ委員

児童会館の事業もコロナ禍で変わった。以前はそれまでは事業をいっぱいやって人を集めて実績を増やして、来館者を増やすことが評価のようなことがあった。コロナ禍で声を出して言えないお母さんたちにとって、何が必要で、どういうところにアクセスしたいのか、一人一人の満足度に寄り添う時代になった。妊婦さんの例だと、未来への希望を考えたいが、アドバイスをする人や賛同者のいる場がない。話を聞いてくれる人が必要である。今回の「イウベ・キクベ」からもこうした声を拾っていくことの必要性を感じた。

F 委員

秋田県生涯学習センターの事業が、今の課題に沿った形で行われていると感じた。質問だが、オーダーメイド型社会教育主事派遣事業や、ファシリテーター養成研修を終えたところで、自分たちで実際にファシリテーターを行っている例はあるか。

事業室班長

ファシリテーター養成研修を受けて、自分でも配布スライドを使ってやってみた、という声をいくつか聞く。ファシリテーターをする際に結論に落とし込むイメージを持つ方もいるが、「話したり聞いたりすることで、何となく方向性が見えるのが熟議」という考え方をもっていけば、経験を積むことでファシリテーターとして育つと考える。全て自前で行うと大変な部分もあると思うので、ファシリテーターは依頼する、ということもあっていいと思う。当センターの皆川が、北東北でコミュニティースクールの考え方と、それから秋田式の熟議を紹介している。岩手県では、ファシリテーター養成研修を受けて活用している例もある。

委員長

10年前よりも中身が濃い活動が行われているという印象をもった。10年前は、講座を受講した方が、いかに活用するか、大学に似たような形でシステムを構築することに集中していた。秋田型の熟議は、探究型授業とも繋がるのかもしれないが、秋田らしさといったものが追求されていて、型にこだわるのではなく、実質的なところで学びが充実し、自立した学習者がさらにそれを広げていくことに結びついているところが良いと感じた。オンラインにおけるコロナ禍の工夫も大変進んでいて、受講者の環境にもよるところはあると思うが、色々な形で努力が積み重ねられている。全国的な色々なネットワークも見られるようになっているので、そういった面も今後工夫されていくのかなと思う。障害者の生涯学習と防災も非常に重要だと思う。個人情報の管理は難しくなっているが、学校や社会福祉協議会などと連携し、ネットワークを作れるという意味でも、生涯学習・社会教育の役割が非常に大きいと思う。実際、災害が起こった時にそれをまた総括して、次の学びに結び付けていくのかという、行政全体のシンクタンク的な役割を果たしていくべきだと思う。市町村の教育委員会事務の点検評価に、社会教育関係の施設も出てくるが、高齢化が進み、衰退して、という話がよく出てくる。そうしたものの打開、ネットワークづくりも考えてほしい。

6 所長あいさつ

新しいネットワークづくりなど、我々の力が役に立てるようなところも示唆していただいた。障害者の生涯学習プログラムづくりの周知の過程など、そういったことを市町村等とも協働する過程で見えてきたものを示した。オンデマンドで、いつでもどこでも、誰でも、といったスマート化についても活用を考えられたと思う。また、当センターの敷居の低さも大切に思う。ファシリテーター研修にもあるように、話しやすさを引き出す、といった部分も突き詰めていければと思う。居場所づくりの学び、人が繋がりを実感できる機会を作ればありがたいと思っている。今日は実りある御意見、御助言、御質問をありがとうございました。

7 閉会